

山下とあるの おんがく びもやま 話

(491)

邦人歌手たちの二重唱が終わり、こんなにも拍手鳴りやまず、は珍しい。歌手の皆さんが、日本人としてはよく歌えた、などの大甘の評価ではなく、正しく名唱の名にふさわしい出来の舞台—そう思わせる公演だった。

9月20日の川西みつなかホールの、ベッリーニ作曲「清教徒」公演。昨年に続いて、イタリアのベルカント・オペラの宝石—テノールとソプラノの歌手を選ぶ、超難曲オペラだ。

17世紀半ばのイギリスのお話。王党派と議会議派の対立—それは旧教と新教の対決でもあった。党派を超えて幸せな結婚をしようとした若者を見舞った、王妃救出の行動による、酷い運命は、愛する娘を奈落に突き落とす。

この時代の悲劇オペラの定

スター・テノール歌手登場か

番、狂乱の場がソプラノの聴かせどころだ。また、テノール泣かせの高音連発という、こちらもハードルの高い難物オペラだ。関西では、これまで外来オペラ団による舞台はあったものの、邦人歌手だけの公演は、もしかして初演か。

山口から突如出現した、藤田卓也さんなる逸材テノールを得て、今回の快拳が実現した。ヒロインを歌った坂口裕子さんの、これまた渾身の歌唱と共に、満堂は興奮の極みに達した。ふたりに絡むバスとバリトンも好唱で、このオペラのパリ初演を飾った、4人の名歌手—プリターニ・カルテットの伝説が、みつなかホールに甦った。

同ホールのこれは屈指の成果であるのはもちろん、邦人歌手の公演を比較しても、近年の出色の舞台となった。観客の拍手の熱さが、如実にそれを物語っていた。演出にも工夫があった。音楽監督の指導よろしきを讃えたい。

(演劇プロデューサー)